



新一万円札に登場 渋沢栄一

※「新しい友達」関連資料

新しい日本銀行券のイメージ

【財務省ウェブサイト (<https://www.mof.go.jp/currency/bill/20190409.html>) より抜粋】

二〇二四年をめどに紙幣（日本銀行券）が一新されます。一万円札に「渋沢栄一」、五千円札に「津田梅子」、千円札に「北里柴三郎」が起用される予定です。

財務省のホームページを見ると、紙幣の図柄に選ばれる人物は、「老若男女が使うものであることから、図柄は一般的によく知られている人物を採用」「一般的にも、国際的にも知名度が高い」などと記され、一定の基準があります。

肖像画を始めとするお札の様式は、財務省と日本銀行、国立印刷局が協議して決めます。最終的な判断は財務大臣が行います。過去に日本銀行券に肖像画として採用されたことがある人物は以下の十七人です。

・神功皇后・板垣退助・菅原道真・和気清麻呂・武内宿禰・藤原鎌足・聖徳太子・日本武尊・一宮尊徳・岩倉具視・高橋是清・伊藤博文・福沢諭吉・新渡戸稲造・夏目漱石・野口英世・樋口一葉

新一万円札に登場 渋沢栄一

※「新しい友達」関連資料

渋沢栄一は、明治から昭和の初めにかけて、日本の産業界をリードした実業家です。第一国立銀行（現みずほ銀行）や、王子製紙、東京海上火災、帝国ホテルなど、多くの企業の設立に関わりました。その数は五百にも上り「近代日本資本主義の父」と呼ばれています。

渋沢栄一の考え方を象徴するのが銀行の設立です。

栄一は、資本主義の考え方を日本に紹介した人物として知られますが、その目的は、民間の力を高め経済活動を活発にすることにありました。中でも、一つ一つ散在している小さな資本を集約すれば、経済を動かす大きな成長資金となることを銀行という仕組みを通じて世に示したのは、大きな功績の一つと言えます。

栄一は、第一国立銀行設立にあたって出

した株主募集布告において、「銀行は大きな河のようなものだ。銀行に集まってこない金は、溝に溜まっていく水やポタポタ垂れている滴と変わらない。せっかく人を利し、国を富ませる能力があっても、その効果はあらわれない」と当時の人々に銀行の仕組みを理解してもらおうべく、このような例え話を残しています。

また、これらの会社を経営する中で、孔子の「論語」を心のよりどころとし、「経済」の発展は常に「道徳」にかなったものでなければならぬと説きました。これは「道徳経済合一説」と言われるものです。

栄一のこの考え方は、産業・技術が日進月歩する現在においても学ぶべきところがたくさんあります。



第一国立銀行の創設

1873(明治6)年
(渋沢史料館所蔵)



東京養育院の板橋本院を訪れた渋沢栄一

[渋沢史料館所蔵]

社会福祉事業しゃかいふくしじぎょうによってたくさんの人を救った渋沢栄一

※「ゴミ拾いはぼくらの手で」 関連資料

渋沢栄一は、ヨーロッパを訪れたときに、生活に苦しむ人を助ける方法や協力の仕方についても学び、帰国後は、社会福祉事業や教育事業に積極的に取り組みました。東京養育院という社会医療施設は、明治五年（一八七二）に創られた体の不自由な人や身寄りのない子どもたちのための施設です。栄一は亡くなるまでの約六十年間にわたって院長（当初は事務長）を務め、運営事業に携わりました。

日清戦争に勝った後、日本は、工業化が進んで急速に豊かになりましたが、それと引き換えに貧富の差が拡大し、養育院の入所者も増える一方でした。この問題について栄一は、「困っている人を見遇すわけにはいかない、大変な思いをしている人々を助けることは、私が行うべき仕事である」と言っています。栄一は、生涯を通して社会福祉事業によって多くの困っている人々を救いました。このような栄一の活動は、社会福祉事業の先駆けとなりました。

「郷土」への思い

※「煮ぼうとう」関係



「諏訪神社」での獅子舞を見る渋沢栄一 [渋沢史料館所蔵]

渋沢栄一は、二十四歳で血洗島を離れても、故郷への思いを忘れることは片時もありませんでした。

中でも、秋祭りの獅子舞を見るのが大好きでした。年の初めには、必ずその日取りを確認し、予定を開けておくように指示していたそうです。栄一は、「夜ふけまで熱中して獅子舞を楽しむことができます。結局のところ少年時代の心に帰るからなのでしょう。」と話しています。

また、故郷に帰ると、泳いだことや相撲を取ったこと、駆け比べをしたことなどを思い起こし、「さいなことまで興味がつきません。」とも話しています。血洗島は、いつの日も栄一の心のふるさとだったのでしょう。

なお、一九一六（大正五）年には、諏訪神社の拝殿が栄一の寄付により完成しました。村民によって、栄一の七十七歳を祝う喜寿碑も境内に建てられました。



せいえん

青淵図書館

〔八基写真帖より〕

また、栄一は郷土の教育や産業の発展に向け、力を尽くしていきます。

明治時代の八基村では、小学校校舎の一部にわずかながらの書物があるのみでした。栄一は、農村にも図書館の充実が大切であると考え、一九一九（大正八）年、八基小学校地内に、自らの私財を投じて図書館を設立しました。また、村民が協同して、産業の育成や研究を進めていくよう指導にもあたりました。そこには、従来通りの方法にとらわれず、皆で調べ議論し合い、相談し合うことが大切であるとする栄一の進取の精神が込められていました。

実業教育にも力を入れていた栄一は、一九二一（大正十）年設立の町立深谷商業学校（現在の県立深谷商業高校）を訪問し、講演をするなど地域の実業教育を推進しました。学校には栄一の書である「至誠」と「士魂商才」の額が残されています。

渋沢栄一と関東大震災

※「いささかなりとも働いてこそ」関係

一九二三（大正十二）年九月一日、午前十一時五十八分、相模湾北部を震源とする巨大地震（最大震度七）が発生しました。この地震は、東京、横浜を中心に、関東各地で多大な被害をもたらしました。死者・行方不明者は約十万五千人とされています（平成十八年理科年表より）。

渋沢栄一は地震のとき、兜町（東京）の渋沢事務所にて強い揺れを感じ屋外に避難しました。そして、周囲の者に導かれて安全に飛鳥山（王子）の自宅にもどることができました。しかし翌朝、渋沢事務所が全焼したことを知ります。栄一が尊敬していた徳川慶喜公の伝記や大事な書類、思い出の数々が跡形もなく灰となってしまう。「なぜ、あのときに大切なものを持って避難するように、注意する

ことができなかったのだろう……。」「と嘆く栄一でしたが、後ろを振り向く栄一ではありませんでした。当時八十三歳の年齢でしたが、身を引き締めて震災からの復旧・復興をめざしていきました。

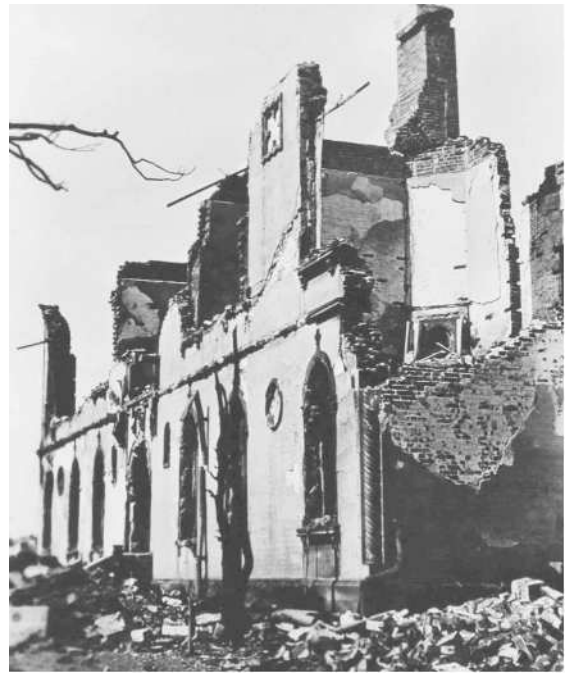
震災から三日後の九月四日、栄一は政府から呼び出されました。政府は、すでに経済界を引退していた栄一に、人々の救済事業を引き受けてほしいと依頼しました。栄一は、自分が副会長を務めている「協調会」の仕事として、被災者のために、避難所や炊き出し場、臨時病院などの設置を進めていきました。

また、東京の復興に向けた帝都復興審議会委員として、東京と横浜間に運河を築き東京の商業を発展させようという栄一ならではの持論を展開しました。

そして、栄一はこの未曾有の大災害に「落胆ばかりしてはいられない」との信念のもと、実業家とし



被災した埼玉県の人々を見舞う栄一
 <1923(大正 12) 年 11 月 17 日>
 ※場所：東京日比谷 [個人所蔵]



全焼した渋谷事務所
 <1923(大正 12) 年 9 月 渋谷篤二撮影>
 ※場所：東京兜町 [渋谷史料館所蔵]

てなすべきこととして大震災善後会を実業家・政治家をまきこんで活動しました。被災者のための義捐金(義援金)を募集し、そのお金で市民を救済したり、市街を再建したりしようとしたのです。その後、県知事や地方団体への義捐金依頼や、新聞広告による義捐金募集により、九月末には第一回分が被災地に配分されていきました。

その一方で、栄一は震災の十日後の九月十一日には、二十四人の知友のアメリカ人に大震災の状況と自分の身の安全を伝える手紙を書いています。そして、その二日後には「将来の復旧に対しては貴国(アメリカ)のご同情とご助力に待たなければならぬことが多いと思っています。よろしくお願いします。」という電報を二十人の企業関係者に送りました。一日も早い復旧・復興にかける栄一の熱い思いがあつたにちがいありません。



現在の富岡製糸場（群馬県富岡市）

とみおかせいしじょう
富岡製糸場と深谷の人々

※「至誠の人尾高惇忠」「レンガづくりへの思い」 関係

富岡製糸場（現在の群馬県富岡市）は明治政府により建設が進められ、一八七二（明治五）年に完成した日本で最初の大製糸場です。

当時、政府の役人（民部省租税正）として渋沢栄一は、この富岡製糸場の建設計画を中心になって考えました。後に初代総理大臣となる伊藤博文らとともに、外国の指導者をまねいて、模範となる大製糸場を建て日本の製糸技術を全国に広げよう、日本の糸（生糸）を外国に輸出して、日本を豊かにしよう、としたのです。

しかし、今までに経験したことのない大工場の建設ですから、たいへんなことがたくさんありました。

①栄一の思いを受け止めた尾高惇忠

富岡製糸場を作るとは、政府の仕事としてほとんど最初のことでした。うまくいって当然、もし失敗



完成当時の富岡製糸場（群馬県富岡市）〔渋沢史料館所蔵〕

したら、新しい政府の信用をなくす心配がありました。そこで、渋沢栄一は、学問の先生であり、また、養蚕のことも見識が深い尾高惇忠が責任者としてふさわしいと考え、ただちに尾高に会って、その思いを伝えました。尾高は、「まさに、それこそ私にとって最適だ、生涯の仕事としてあたろう。」と、こたえたそうです。

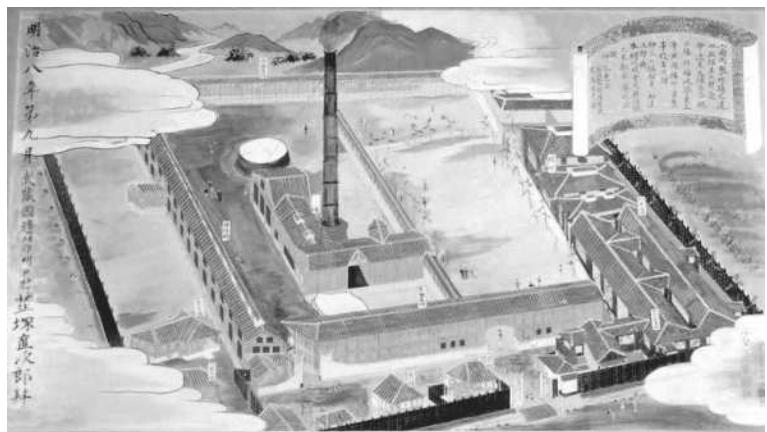
② 深谷のかわら職人の技術を生かす

一八七〇（明治三）年十二月、フランス人技師がかき上げた設計図を見て、尾高らは、驚いてしました。特に、数十万個以上といわれる大量のレンガが必要となったからです。当時の日本では、ほとんど使われていませんし、しかも輸入しては工事が遅れてしまいます。尾高は困ってしまいましたが、渋沢栄一に相談し、かわらを製造する技術をもつてすれば、レンガを作れると考えました。た

だちに、深谷の明戸村の菰塚直次郎に「レンガは土を焼いて作るらしいが、深谷あたりで焼いているかわらも、もとは土。やってやれないことはないと思うが、どうだろうか。」と話をもちかけたのが富岡製糸場のレンガ製造の始まりでした。尾高の依頼を受けた菰塚直次郎は、ただちに深谷からかわら職人を呼びよせ、富岡の東、福島（現在の甘楽町）において日本ではほとんど前例のない大量のレンガ作りを始めました。フランス人の指導を受け、試行錯誤を繰り返しながら、職人たちが手作業で一つ一つ作り上げていったのです。

富岡製糸場が建てられて、一五〇年近くが経ちます。今もなお当時の面影を残し、日本の近代遺産として大切に保存されています。

○富岡製糸場は、平成二十六年に世界文化遺産に登録されました。



菰塚直次郎が奉納した額（明治8年9月）

〔笹森稻荷神社所蔵：複製〕

富岡製糸場は、模範工場としての役割を果たし、日本の製糸業の発展に影響を与えました。また、「生糸」は日本の大切な輸出品となっていました。※同じような額（絵馬）は、深谷の永明稲荷神社にも奉納されました。

※ポール・ブリュナ

フランス人の生糸検査人で、富岡製糸場の計画書をたてた人です。ブリュナは、建設地を決め、建設を指導するなど重要な仕事をして、およそ五年間、富岡製糸場のために働きました。

富岡製糸場の建設・運営にかかわった「深谷の三偉人」



渋沢栄一
[渋沢栄一記念館所蔵]



荻塚直次郎
[個人所蔵]



尾高惇忠
[渋沢栄一記念館所蔵]



【設立当時の富岡製糸場】 【群馬県立歴史博物館所蔵】

※ 平成26年6月、世界文化遺産に登録された富岡製糸場の設立には、現在の深谷市出身の、渋沢栄一、尾高惇忠、荻塚直次郎が、さまざまな形で尽力しました。

「近代日本資本主義経済の父と言われた栄一」、「栄一の師であり、初代富岡製糸場長となった惇忠」、「富岡製糸場建設に力を尽くした直次郎」、深谷市ではこれら三偉人の顕彰に努めています。

地域の和算家 藤田 雄山

※「和算の大先生 藤田雄山」関連資料

埼玉県深谷市川本地区出身の江戸時代を代表する和算家。関孝和の起こした関流の後継として、数々の書物を発行するとともに、多くの弟子を育てた教育者。

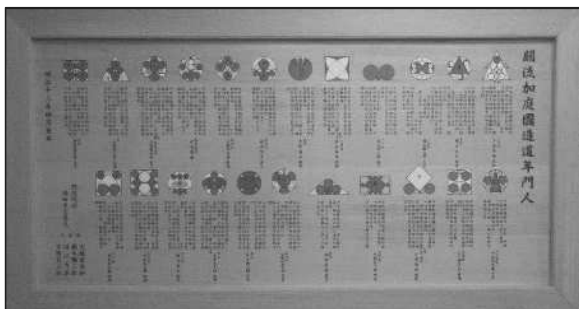
年代	できごと
一七三四年	現在の深谷市川本地区に生まれる。
一七五六年	江戸で和算の主流である関流の山路主住の弟子となる。
一七六二年	江戸幕府の仕事（幕府天文方手伝い）をする。
一七六六年	師匠の山路主住より、関流の免許（印可状）を授かり、関流後継となる。
一七六八年	久留米藩（今の福岡県）の藩主である有馬候に算学師範として仕える。
一七八一年	『精要算法』という和算の教科書を出す。
一八〇七年	七十三歳にて亡くなる。

「和算」について

和算は、日本独自に発達した数学です。今の数学と内容的にはほとんど同じことをやっていました。ただ、江戸時代の数学は、たて書きで、今とはちがう記号を用いて計算していました。また、計算のための道具として、算盤や高度になると算木が使われていました。

「和算と算額」

和算は、江戸時代の終わりころには、非常に高度に発展しました。当時の和算家は、問題を作ったり解いたりしたものを算額として神社や寺に納めました。埼玉県や深谷市内にも、たくさん算額が納められています。



加須市愛宕神社に奉納された算額（復元されたもの）